

児童養護施設で暮らす子どもの生き立ちへのかかわり 全国の児童養護施設に対するアンケート調査から

曾田 里美

The Works on Children's Life Story in Child Foster Care Institutions From the Questionnaire Survey on Child Foster Care Institutions throughout Japan

Satomi Soda

要 約

社会的養護の子どもに対するライフストーリーワーク (LSW) は、生活場面型、設定型、セッション型という多様な形態があり、多角的に子どもの生き立ちに働きかける支援である。ところが、生活場面型のような LSW の視点をもった日常的なかかわりや支援を LSW と捉える考え方は浸透しておらず、LSW に関して具体的にどのような (どこまでの) 支援をさすのか共通認識が形成されていない実情がある。そこで、本研究では生活場面型を含むすべての形態の LSW 実施の状況を把握するために、LSW という用語を取らず「子どもの生き立ちへのかかわり」について児童養護施設に対して全国調査を行った。

その結果、「子どもの生き立ちへのかかわり」は、生活場面でのかかわりが多く、実施度も高いことから、生活場面型 LSW が施設において広く実施されていることが明らかとなった。また、LSW に関する理解については、セッション型を LSW と考える施設があることから、今後は LSW の推進のために、生活場面におけるかかわりを含めた LSW の捉え方をより広げていくことの重要性が示唆された。

キーワード：ライフストーリーワーク、生き立ちへのかかわり、児童養護施設

I. 研究の背景と目的

1. ライフストーリーワークの広がりや形態

昨今、児童養護施設ではライフストーリーワーク (LSW) など子どもの生き立ちを取り扱う支援が進められている。日本における LSW には、主に生活場面型 LSW とセッション型 LSW とい

う2つの形態があり、それらが段階的に行なわれている (山本・檜原・徳永・平田2015: 23-25; 才村・大阪ライフストーリー研究会2016: 8-11)。生活場面型は、子どもの日々の様子や出来事を記録や写真に残しておくことや、日常場面で生活上の出来事や生き立ちに働きかけ、子どもと共有することである。セッション型は、生活場面とは区別した場面で、10回程度 (数か月) かけて、多様

なワークを取り入れながら計画的に少しずつ子どもが自身の生い立ちを整理していくのを支援する。この2つの形態に加え、曾田(2018)は、LSW実施施設への聞き取り調査の分析から設定型LSWを見いだした。設定型は、生活場面とは異なる1回から数回の面談や訪問の中で子どもの生い立ちを扱っていく。生活場面型とセッション型の中間に位置するものである。このようにLSWは多様な場面・形態で実施されている。

ところが、日本のLSWの導入は、セッション型を主とするイギリスから学んだという経緯から、「LSW＝セッション型」というイメージが強い傾向がある。そのため生活場面型や設定型を含めてLSWとする捉え方が浸透していないことが予想される。この傾向はLSW(生い立ちの整理)に関する以下の2で言及する全国的な児童養護施設調査にも見受けられる。

2. ライフストーリーワークに関する認識の曖昧さ

曾田(2013)は、LSWを「子どもが過去に起こった出来事や家族のことを理解し、信頼できる大人とともに自身の生い立ちを整理する一連の作業」と定義し、LSWの実施状況を調査した。その結果、LSW実施施設は全施設の37.2%であり、その内訳はLSWを主体的に実施(6.4%)、類似の取り組みを主体的に実施(16.3%)、LSWおよび類似の取り組みを児童相談所に協力する形で実施(14.5%)であった。調査においてLSWと類似の取り組みの違いについて言及していない。調査者である曾田は、当時、LSWをセッション型、類似の取り組みを生活場面型や設定型と想定していたが、引き続き行った聞き取り調査から施設側はそのように区別していないことが判明した。

寺崎(2015a, 2015b)は「生い立ちの整理」の現状を調査する中で、「生い立ちの整理」を「子

どもたちが知らなかった事実や、忘れてしまいたいような事実に子どもたち自身が向き合い、その事実を認め現在を受け入れ、未来に向かって一歩を踏み出すことを支える支援」としている。その結果、「生い立ちの整理」を行っている施設は47.2%であった。今後の課題として、「生い立ちの整理」の実施内容について共通認識が形成されていないことを挙げ、入所理由の説明や日常での何気ない関わりを「生い立ちの整理」に含めるのか検討が必要であると指摘している。

みずほ情報総研(2016)は、「社会的養護関係施設における親子関係再構築支援の取組に関する調査」の中で、児童対象の治療内容・プログラムの一つにLSW(生い立ちの整理)を位置づけて、親子再統合の目標別にLSWの実施状況を調査している。その結果、「家庭復帰を目標とするケース」(25.3%)、「一定の距離をとった交流を継続しながら親子関係を構築するケース」(34.8%)、「親子交流がなく(望ましくない)、永続的な養育の場を提供するケース」(39.6%)に対してLSW(生い立ちの整理)が実施されていた。この結果の考察では、LSWに「生い立ちの整理」とカッコ書きで付記したため、「実施している」の回答には、セッション型を実施していない(LSWの視点をもった日常生活の中での支援や関わりをしている)施設も含まれると指摘している(みずほ情報総研2016:17-18)。つまり、調査者側は、LSWはセッション型を示し、「生い立ちの整理」は生活場面型を含むと理解していることが窺える。

これまでのLSWに関する全国調査では、LSWについて具体的にどのような(どこまでの)支援をさすのか明示されていない。LSWについて、調査に回答する施設や実施者のみならず、調査者もLSWと考える支援の中身に違いがあり、共通認識が形成されていないことが分かる。このよう

児童養護施設で暮らす子どもの生い立ちへのかかわり 全国の児童養護施設に対するアンケート調査から

に LSW に対する捉え方が異なった状態では、全国的な実施状況の把握は困難といえる。

II. 研究目的

本研究では、セッション型に限らず、生活場面型、設定型すべての形態の LSW の実施現状を把握するために、LSW という用語を取って使わず「子どもの生い立ちへのかかわり」について全国調査を実施する。そこから LSW をどのように捉え、どのような実践が行われているのか探究することを目的とする。なお、本研究では、子どもの生い立ちにかかわる全ての取り組みを LSW と捉える。

III. 研究方法

1. 調査対象と調査方法

全国の児童養護施設597か所に「子どもの生い立ちへのかかわり」に関する調査票を郵送し、記入後に返送してもらい回収した。回答の記入は、生い立ちへのかかわりを中心となっている、もしくは施設におけるそのような実践を把握している職員に依頼した。調査には209施設から回答があり、回収率は35%であった。調査期間は、2021年2月20日から3月18日である。

2. 調査項目と分析方法

調査票の構成は、1) 回答者・施設のプロフィール、2) 「子どもの生い立ちへのかかわり」(52項目)の実施状況、3) 「子どもの生い立ちへのかかわり」に関する意見である。2)の実施状況は、各質問項目に対して、①施設における実施度(5件法)、②実施場面・形態(生活場面で実施・セッション型 LSW の中で実施¹⁾・生活場面と区別した場面で実施²⁾・その他から最も当てはまるものを1つ選択)、③支援主体(中心に行う職種として、

施設長・主任・生活担当職員・施設の心理職・家庭支援専門相談員・児童相談所・その他から最も当てはまるものを1つ選択)の3点について回答を求めた。また、2)の実施状況を問う52項目の作成は、曾田(2014)による LSW 実施施設への聞き取り調査から抽出し、文献から必要な項目を追加、整理した。

本研究は、記述統計による分析を中心に行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号2019-27-1)。また、『一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規定』および『社会福祉学会研究倫理規定にもとづく研究ガイドライン』に基づき、調査票に調査の回答が任意であること、個人情報の保護やプライバシーの尊重への留意、調査票やデータの管理方法について明記した。

IV. 調査結果

1. 回答者の属性(職種)

回答者の職種では、家庭支援専門相談員(FSW)が44名(21.1%)と一番多く、次いで主任(児童指導員・保育士)41名(19.6%)、児童指導員・保育士35名(16.9%)であった。

2. 「子どもの生い立ちへのかかわり」実施状況

1) 実施度の高い項目

表1は、「子どもの生い立ちへのかかわり」52項目に対して、どの程度行われているか(実施度)を5件法で尋ねた結果、平均値の高い上位10項目を示したものである。実施場面・形態および支援主体の割合も示している。実施場面・形態に斜線が入っている項目は、支援者が子どもの生い立ちに配慮した環境整備を行っている項目であり、子

どもとの直接的なかわりがないということで実施場面・形態の回答を免除した。

項目の中身をみていくと、子どもの誕生日を大切にしている、日常の何気ない出来事を話題にして共有する、子どもが語る入所前の話を傾聴する等であり、10項目の平均は4.46と高かった。また、子どもに関する具体的なエピソードや成長を記録する、子どもが自分のアルバムをいつでも見られるようにする等、子どもの生き立ちを大切にしている生活環境づくりに関する項目もみられる。実施する場面・形態では、生活場面がほぼ60%以上を占め

ていた。また支援主体は、高い割合で生活担当職員が占めており、そのうち6項目が95%以上であった。

2) 実施場面・形態別の「子どもの生き立ちへのかわり」

「子どもの生き立ちへのかわり」の実施場面・形態については、子どもとの直接的なかわり41項目に対して、それぞれ①生活場面の中で実施、②セッション型LSWの中で実施、③生活場面と区別した場面で実施、④その他、から最も当ては

表1 実施度 上位10項目

| 順位 | 項目 | 実施度 (平均値) | 場面・形態 (%) | 支援主体 (%) |
|----|---|--------------|--------------------------------|---------------------------------|
| 1 | 子どもの誕生日を大切に言葉がけやお祝いをする | 4.92 | 生活場面 (88.5) | 生活担当 (96.6) |
| 2 | 日々の子どもの何気ない出来事を話題にして共有する | 4.61 | 生活場面 (92.8) | 生活担当 (96.1) |
| 3 | 子どもが語る入所前の生活や家族の話を傾聴する | 4.50 | 生活場面 (66.9) 設定 (20.1) | 生活担当 (86.1) |
| 4 | 子どもの家族に対する複雑な気持ちを理解し、受け止める | 4.46 | 生活場面 (60.8) 設定 (30.6) | 生活担当 (81.4) |
| 5 | 生活の中で子どもの具体的なエピソードを記録する | 4.45 | | 生活担当 (98.5) |
| 6 | 子どもが描く将来の希望や目標について一緒に話す | 4.36 | 生活場面 (75.6) 設定 (15.8) | 生活担当 (96.5) |
| 7 | 支援者が、アルバムなど個々の子どもの成長の記録をつくる | 4.35 | | 生活担当 (96.2) |
| 8 | 自分が悪いから措置されたを受け止めている子どもに、あなたは悪くないというメッセージを伝える | 4.34 | 生活場面 (60.3) 設定 (28.7) | 生活担当 (75.5) |
| 9 | 入所理由や家族に対する子どもの疑問を受け止める | 4.31 | 生活場面 (57.9) 設定 (33.0) | 生活担当 (73.0) FSW (13.5) |
| 10 | 子どもがいつでもアルバム等見られるようにしている | 4.28 | | 生活担当 (95.7) |

支援主体について、FSW = 家庭支援専門相談員

まるものを1つ選択してもらった。①を生活場面型、②をセッション型、③を設定型と同定した。1つの場面・形態が50%以上を占める項目を取り出したところ、41項目のうち生活場面型が20項目、設定型が11項目であった。残りの10項目は、3つの場面・形態が選択されていたが、そのうちセッション型の割合が比較的高かった(20%以上)ものは4項目あった。以下、実施場面・形態ごとに詳細をみていく。

①生活場面型の実施状況

表2は、生活場面型で実施している20項目のうち上位10項目を示したものである。生活場面での実施率が高い順に項目とその実施度平均値、支援主体を記している。項目の中身をみると、生活の

中で子どもと出来事や日々の成長を共有する、生い立ちや過去の出来事に関する子どもの話を傾聴する、生い立ちに関する子どもの疑問や不安を受け止めるという内容であった。日常の会話のなかで生い立ちを話題にしていることが分かる。また、「生い立ちや家族について疑問に思うことは尋ねてもよいと子ども話す」(順位10)という項目が入っていることから、生い立ちについて話題にしやすい雰囲気づくりに努めていることが窺われる。

生活場面型の項目の実施度平均値は比較的高く、10項目の平均は4.20であった。支援主体はほとんどを生活担当職員が占めていた。

表2 生活場面型 上位10項目(20項目中)

| 順位 | 項目 | 実施度(平均値) | 生活場面型の割合(%) | 支援主体(%) |
|----|--|----------|-------------|-------------------------|
| 1 | 日常の子どもの何気ない出来事を話題にして共有する | 4.61 | 92.8 | 生活担当(96.1) |
| 2 | 子どもの誕生日を大切に言葉がけやお祝いをする | 4.92 | 88.5 | 生活担当(96.6) |
| 3 | アルバムを見ながら子どもの成長や過去の出来事について子どもと話す | 3.93 | 87.1 | 生活担当(96.6) |
| 4 | 子どもとの会話の流れで支援者自身の過去の体験や家族の話をする | 3.45 | 87.1 | 生活担当(93.7) |
| 5 | 子どもが描く将来の希望や目標について一緒に話す | 4.36 | 75.6 | 生活担当(96.5) |
| 6 | 生い立ちや家族に関する新たな事実を知ることによって不安定になった子どもを受け止め、支える | 4.18 | 74.6 | 生活担当(89.1) |
| 7 | 子どもの幼い頃を知る支援者が当時の子どもの様子を子どもに話す | 3.80 | 70.3 | 生活担当(73.1) |
| 8 | 子どもが生まれてきたことを肯定的に説明する | 4.16 | 67.9 | 生活担当(82.9) |
| 9 | 子どもが語る入所前の生活や家族の話を傾聴する | 4.50 | 66.9 | 生活担当(86.1) |
| 10 | 生い立ちや家族について疑問に思うことは尋ねてもよいと子どもに話す | 4.12 | 65.1 | 生活担当(71.6) FSW(10.4) |

②設定型の実施状況

表3は、設定型で実施している11項目を示したものである。項目の内容は、生い立ちや家族の状況、入所理由、施設生活の見通しについて説明する、子どもの疑問に回答する、家族や離れて暮らすきょうだいの再会の機会をつくるというものであった。子どもと個別に生い立ちに触れる時間を設けている。設定型の11項目の実施度の平均は生活場面型より低く、3.55であった。支援主体として、生活担当職員、家庭支援専門相談員、児童相談所がかかわっており、項目によってかかわる職種が異なっていた。子どもに説明する場面では、児童相談所が対応している傾向がみられた（順位1、4、7）。

③セッション型の実施状況

表4は、3つの場面・形態が選択された11項目のうち、セッション型での実施率が20%以上の4項目を示したものである。項目の中身は、ライフストーリーブックなど作成しながら生い立ちを整理する、エコマップを作成しながら大切な人や支えになっている人を確認する、子どもの生い立ちを絵本や文章にまとめて説明する、子どものゆかりの場所を一緒に訪問するといった、一般的にセッション型 LSW の中で実施されるコンテンツが含まれていた。これら4項目の実施度の平均は他の場面・形態より低く、2.79であった。支援主体は、生活担当職員、児童相談所の順に高く、次いで他の場面・形態ではほとんどみられなかった

表3 設定型 11項目

| 順位 | 項目 | 実施度 (平均値) | 設定型の 割合 (%) | 支援主体 (%) |
|----|--|--------------|----------------|--|
| 1 | 子どもに施設生活や家庭復帰の見通しについて説明する | 3.67 | 75.6 | 児相(36.4)生活担当(26.3) FSW (24.4) |
| 2 | 子どもが長期間会っていない家族と再会する機会を必要に応じてつくる | 3.90 | 75.1 | FSW (34.5) 生活担当 (27.5) 児相 (27.0) |
| 3 | 子どものきょうだいが別施設や里親宅にいる場合、きょうだいの面会の場をつくる | 3.78 | 70.3 | 生活担当 (31.4) FSW (30.9) 児相 (27.8) |
| 4 | 子どもの年齢や発達に応じて入所理由を説明する | 3.71 | 68.4 | 児相(36.3)生活担当(33.8) FSW (14.4) |
| 5 | 入所理由や家族に対する子どもの疑問に回答する | 4.19 | 62.7 | 生活担当(36.8)児相(27.4) FSW (19.9) |
| 6 | ジェノグラムなど作成しながら、家族の情報を伝える | 2.57 | 61.7 | 生活担当(38.3)児相(28.0) FSW (19.7) |
| 7 | 子どもの希望や状況に応じて生い立ちや家族の状況を説明する | 3.89 | 55.0 | 生活担当(34.0)児相(32.5) FSW (19.0) |
| 8 | 入所理由をどのように理解しているか子どもに確認する | 3.50 | 54.5 | 生活担当 (56.2) FSW (14.4) 児相 (10.9) |
| 9 | 子どもの幼い頃を知る人(乳児院の職員など)と子どもが交流する機会をもつ | 3.07 | 52.6 | 生活担当 (59.6) FSW (14.1) |
| 10 | 入所後(1か月頃)に、子どもから入所前の生活や入所理由について話を聞く | 3.21 | 51.2 | 生活担当 (54.0) FSW (15.2) 心理 (12.1) 児相 (10.6) |
| 11 | 子どもに生い立ちや家族に関する新たな事実を伝えて、その事実に対する意味づけを支援する | 3.57 | 50.2 | 生活担当(50.0)児相(25.0) FSW (11.2) |

支援主体について、児相＝児童相談所、心理＝施設の心理職

施設の心理職となっていた。心理職がかかわっているところがセッション型の大きな特徴といえる。

3. 「子どもの生い立ちへのかかわり」に関する意見

1) 必要度と総実施度

以下の図1と図2は、「子どもの生い立ちへのかかわり」をどの程度必要と考えるか(必要度)と、どの程度行っているか(実施度)についてそれぞれ

5件法で尋ねた結果である。実施度は、「子どもの生い立ちへのかかわり」の実施状況で個々の項目ごとに算出した実施度と区別するために、総実施度と表記する。必要度は、「とても必要」が一番多く(163件)、平均値は4.74であった。総実施度は、「やや行っている」が一番多く(129件)、平均値は3.69であった。この平均値差について対応のあるt検定を行ったところ、1%水準で有意であった($t=17.63$ 、 $df=208$ 、 $p < .001$)。

表4 セッション型が高い項目

| 順位 | 項目 | 実施度(平均値) | セッション型の割合(%) 他の場面(%) | 支援主体(%) |
|----|--|----------|-------------------------|----------------------------------|
| 1 | 子どもと一緒にライフストーリーブック(生い立ちの記)などを作成しながら生い立ちを整理する | 2.65 | 31.1 設定型(38.3) | 生活担当(61.5)、 児相(18.2)、心理(11.2) |
| 2 | 子どもとエコマップなど作成しながら、今の自分にとって大切な人や自分の支えになっている人を確認する | 2.27 | 24.4 設定型(40.7) | 生活担当(61.5)、 児相(11.7)、心理(11.2) |
| 3 | 生まれた病院、昔住んでいた家、乳児院など子どものゆかりの場所を一緒に訪問する | 3.78 | 23.4 設定型(39.7) | 生活担当(74.9)、 FSW(8.4) |
| 4 | 子どもの生い立ちや家族に関する情報を支援者が絵本や文章にまとめて子どもに説明する | 2.42 | 21.5 設定型(47.4) | 生活担当(47.7)、 児相(28.2)、心理(11.5) |

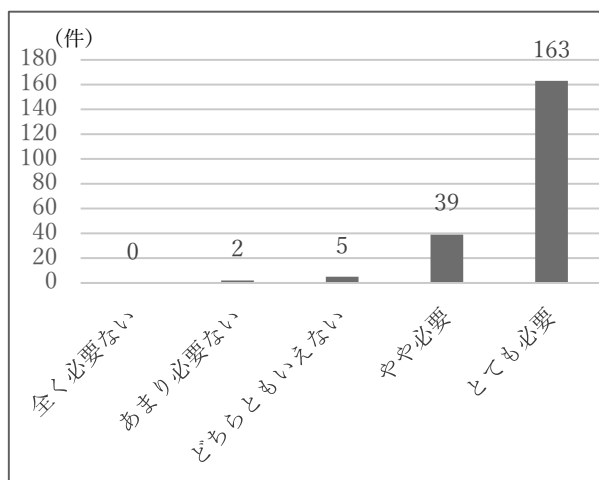


図1. 「子どもの生い立ちへのかかわり」必要度

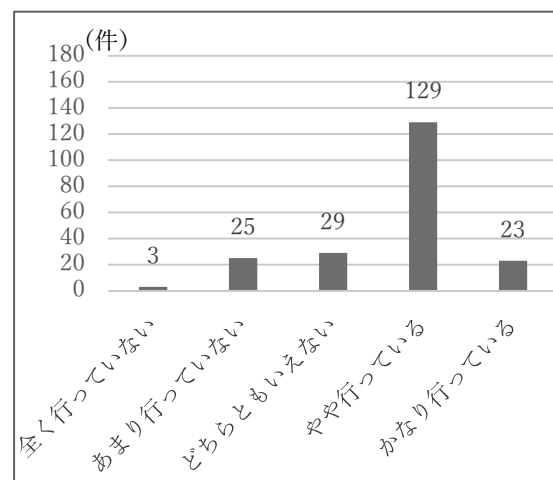


図2. 「子どもの生い立ちへのかかわり」総実施度

2) ライフストーリーワークの理解

図3は、LSWをどのように理解しているか尋ねたものである。「日常における子どもの生き立ちや出来事などを扱うかかわりを含めて意味する」が一番多く122件(58.4%)、次いで「セッション型LSWを通して子どもと一緒に生き立ちを整理することを意味する」53件(25.4%)であった。LSWについて「知らない」、「聞いたことはあるが詳しいことは分からない」の回答もあり、合わせて16件(7.7%)であった。その他では、「子どもが知りたい内容について知りたい時に伝える」、「職員間で子どもの情報(生き立ち)を引き継ぎ、共有しておく」など、形態に捉われない個々のLSWに関する考え方が記されていた。

3) ライフストーリーワークの理解と必要度、総実施度の関係

表5は、LSWの理解別に「子どもの生き立ちへのかかわり」の必要度と総実施度の平均値を算出し、その違いを示したものである。LSWの理解のうち「知らない」と「聞いたことはあるが詳しいことは分からない」を合わせて「よく分からない」とした。必要度については、LSWの理解に拘わらず平均値は4.66~4.89であり違いは見られなかった。総実施度については、LSWを「よく分からない」の平均値は2.81と低く、「日常のかかわりを含めて意味する」や「その他」の平均値は3.84、4.06と高い結果となった。必要度と総実施度それぞれ一元配置の分散分析を行った結果、総実施度に関して1%水準で有意差がみられた。さらに、群間での有意差をみるために総実施度について多重比較を行った結果、「日常のかかわりを含めて理解する」と「その他」以外の群間で5%水準以下の有意差がみられた。

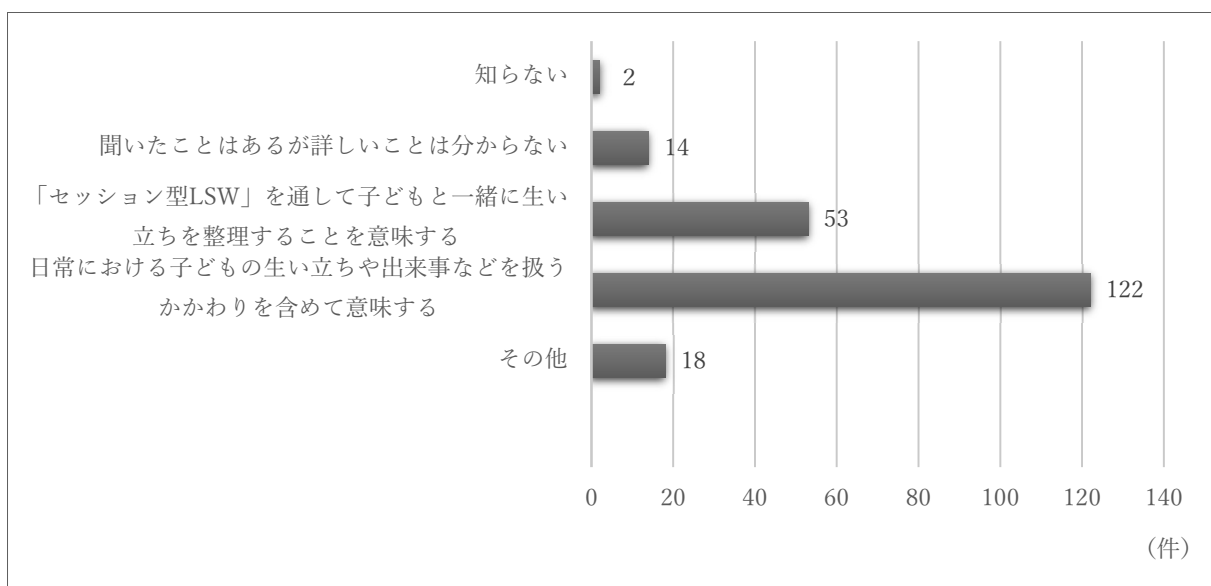


図3. LWSの理解

表5 「LSW の理解」による必要度、総実施度

| LSW の理解 | 「生い立ちへのかかわり」必要度 | | | 「生い立ちへのかかわり」総実施度 | | |
|------------------|-----------------|------|------|------------------|-------|--------|
| | 平均値 | 標準偏差 | F 値 | 平均値 | 標準偏差 | F 値 |
| よく分らない | 4.69 | .479 | .887 | 2.81 | 1.276 | 9.934* |
| セッション型 LSW を意味する | 4.66 | .553 | | 3.47 | .932 | |
| 日常のかかわりを含めて意味する | 4.75 | .579 | | 3.84 | .681 | |
| その他 | 4.89 | .323 | | 4.06 | .873 | |
| 平均 | 4.74 | .548 | | 3.69 | .874 | |

* $p < .001$

V. 考察

1. 調査の回答者からみるライフストーリーワークの広がり

本調査の回答は、子どもの生い立ちへのかかわりを中心となって行っている、もしくは施設におけるそのような実践を把握している職員に依頼した。その結果、回答者は家庭支援専門相談員、主任（児童指導員・保育士）、児童指導員・保育士の順で多く、その次が施設長であった。

曾田(2013)は、全国の児童養護施設を対象に「ライフストーリーワーク実践に関する実態調査」を行っており、回答者については今回と同様な依頼をした。そのときの結果は、施設長が25.3%と一番多く、次いで主任（児童指導員・保育士）、家庭支援専門相談員（ともに21.2%）であった。調査名は、今回は「子どもの生い立ちへのかかわり」であり、前回の「ライフストーリーワーク」とは異なるが、このような子どもの生い立ちに関する調査を実施した場合、10年前はその回答を施設の代表者である施設長が担っていたが、次第に生活担当職員に移行していることが推測できる。回答者の変化から、LSW がより施設における支援として根付いてきていることが窺われる。

2. 「子どもの生い立ちへのかかわり」の形態別実施状況

「子ども生い立ちへのかかわり」は、生活場面でのかかわりが多く、実施度も高いことが明らかとなった。次いで、設定型による実施が続いていた。生活場面で、生活担当職員が子どもと出来事や生い立ちを共有し、子どもの話を傾聴して受け止めるかかわりを丁寧に行い、具体的に子どもの疑問に答える（説明する）という対応は設定型の中で行われていた。設定型では、主に生活担当職員、家庭支援専門相談員、児童相談所職員が支援主体としてかかわっており、特に子どもの生い立ちや家族に関する新たな事実を説明するときは児童相談所が対応していた。施設内外問わず、子どもに様々な職種がかかわっている中で、各々の職種が子どもにとってどのような役割を担っているのかを明確にし、子どもにとって理解しやすい、受け入れやすい職種が対応することが重要であるといえる。

一般的にセッション型 LSW で行われているコンテンツは、セッション型より設定型で実施されていた。コンテンツは、子どもとジェノグラムやエコマップを作成して家族関係や現在の人間関係を整理する、支援者作成の絵本等を使って生い立ちを分かりやすく説明する、子どものゆかりの場

所と一緒に訪問して当時を振り返るといふものである。セッション型で10回程度（数か月）かけて体系的に行われているプログラムの中から、その時々に必要なコンテンツを取り出して設定型で実施していることが明らかとなった。

本来セッション型の中で実施する内容が、設定型で行われている理由として次の2点が考えられる。1点目は児童養護施設の入所児童に障害等のある児童が増加していることである。平成30年度の児童養護施設入所児童等調査によると、障害等のある児童は39.4%であり、なかでも発達障害（19.6%）、知的障害（11.3%）が多い（厚生労働省2020）。障害のある子どもにLSWを実施する場合は、子どもの理解力、許容できる情報量など考慮する必要がある。その場合は、セッション型で時間をかけて多くの生い立ちに関する情報を扱うより、1、2回程度で少ない情報を扱い、それを繰り返すほうが有効と考えられる。

2点目は児童養護施設の小規模化に伴う生活形態や職員配置の変化である。小規模化については、子ども6～8人が1つのホームで2人以上の職員と生活を営む小規模グループケアが推進されている。2020年10月現在、敷地内における小規模グループケアは40.4%、敷地外の分園型では16%となっている（厚生労働省2022）。セッション型LSWでは、今回の調査からも主な実施者は施設の心理職が担っていることが推察される。一般的にセッション型は、実施者と子どもが1対1で行うのではなく、そこに生活担当職員が同席する場合が多い。子どもが安心してLSWに取り組むためでもあり、生活担当職員とのアタッチメント形成を促すためにも同席は有効と考えられている（植原2015：170-171）。施設の生活形態が大舎制の頃は、大勢の職員が大勢の子どもたちと生活を共にしていたため、セッション型に生活担当職員

が参加することは職員体制からみてそれほど難しくはなかった。しかし、生活形態の小規模化が進み、一つの寮舎（ホーム）に職員が1、2人しか勤務していない中で、セッション型に生活担当職員が同席する体制を維持することは困難となっている。

このように入所児童の変化、施設の生活形態の変化が、セッション型の実施度の低さとそれに代わる設定型の実施に影響を与えていると考える。そういう意味では、設定型は必要なコンテンツを取り出して行えるという有用性の高さが強みといえる。しかし、あくまでもLSWでは、「点滴のように」（山本・植原・徳永・平田2015：77）時間をかけて少しずつ子どもが自分の過去（生い立ち）を整理し、現在、未来の自分とつなげていくことに意味がある。セッション型に比べて簡便との理由で、安易に設定型を選ぶことのないよう注意が必要である。

3. ライフストーリーワークの理解と「子どもの生い立ちへのかかわり」の関係

LSWの理解については、「生活場面でのかかわりを含めてLSW」と理解している施設が約60%を占めた。当初の「LSW＝セッション型」というイメージが強いという予想を否定する結果であった。しかしながら、「セッション型をLSWと捉える」施設も約25%みられた。また、「LSWについてよく分からない」施設は約8%あり、LSWという支援についてより周知していく必要性が示唆された。

LSWの理解と「子どもの生い立ちへのかかわり」の関係では、必要度についてはLSWの理解に拘わらず必要と考えられていた。一方、施設として「子どもの生い立ちへのかかわり」をどの程度行っているかを問う総実施度については、

LSW の理解によって違いがみられた。「LSW についてよく分からない」施設は、総実施度が低いことから、子どもの生い立ちを意識したかかわりをしていないため、LSW への関心や理解が乏しいことが考えられる。「セッション型を LSW と捉える」施設も、総実施度は低い傾向がみられた。総実施度が低い理由として、生活場面における子どもの生い立ちへのかかわりは実施できていても、それを LSW と捉えていないため、結果として総実施度の評価が「実施できていない」となっていることが推察される。また、「LSW = セッション型」という理解によって、生活場面でのかかわりを超えてセッション型に挑もうとするため、LSW や生い立ちにかかわるハードルを上げてしまい、実施に踏み切れないことが考えられる。

今回の調査では、生活場面型の実施度は、5 件法で 4.0 点以上の得点が多かったことから、8 割以上実施されていることが明らかとなった。それでも従来の全国調査で LSW の実施率が 4～5 割に留まっていたのは、LSW をセッション型と考え、生活場面型を含めて捉えられていないことが一つの要因といえるだろう。今後、LSW を推進していくためには、生活場面における生い立ちへのかかわりを含めた LSW の捉え方をより広げていくことが重要といえる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の調査は、多様な形態の LSW の実施状況を明らかにするために、「子どもの生い立ちへのかかわり」各項目について実施度に加えて、実施場面・形態と支援主体の 2 点の回答を求めた。さらに、実施場面・形態、支援主体の回答は、ともに選択肢から最も当てはまるものを 1 つ選ぶという方法をとった。LSW は子どもの生い立ちという個別性の高い内容を扱うため、実施方法や内

容に決められた形は無く、個々の子どもに応じて行われる。それは、実施する形態、実施者（どの職種が実施するか、あるいは実施に参加するか）も同様である。特に実施者に関しては、複数の職種がチームで対応する場合も多い。つまり、子どもの状況によって実施形態や実施者は様々であり、一つに絞りづらい側面がある。そのため、調査の回答者からは、実施場面・形態、支援主体を一つだけ選ぶ回答が困難であったという意見が多数あった。一つに絞る回答を強いた結果、施設現場における LSW の実情をどこまで反映することができたのか疑問が残る。その限界は認めるとしても、生活場面型、設定型、セッション型の 3 形態の LSW の実施傾向、生活場面型の実施度の高さを見いだせたことは意義があると考えられる。

今後は、本調査の多変量解析による分析を通して、多様な形態の LSW 実践を検証し、各形態の LSW の関連性や展開過程を明らかにしていくことを課題としたい。

謝辞

本研究にご協力いただいた全国の児童養護施設の方々に深謝いたします。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

付記

本研究は JSPS 科研費（課題番号：19K14000）の助成を受けて行ったものである。また、本研究の一部を日本子ども家庭福祉学会第 23 回全国大会（2022 年 6 月）において発表している。

注

- 1) 調査票の実施場面・形態の選択肢「セッション型 LSW のプログラム（ワーク）の中で実施」には、以下のような説明を加えた。
「セッション型 LSW とは、日常生活と区別した場面で、数回～10数回（数か月）かけて、多様なワークを入れながら計画的に少しずつ子どもが実施者と一緒に生い立ちを理解し、整理していく取り組み。ライフストーリーブック等（生い立ちを整理した記録）を作成したりする」
- 2) 調査票の実施場面・形態の選択肢「生活場面と区別した場面で実施」には以下のような説明を加えた。
「日常生活と区別した場面を設定するが、セッション型 LSW とは異なる面接（心理面接場面を含む）や訪問等の中で、子どもに家族の情報を伝える、子どもと過去の出来事について話すなど生い立ちを取り扱う」

ライフストーリーワークの実態 アンケート調査の分析から」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』5, 35-48

曾田里美（2014）「児童養護施設におけるライフストーリーワークの取り組み 聞き取り調査を通して」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』6, 59—66

曾田里美（2018）「児童養護施設におけるライフストーリーワーク実践の現状」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』10, 35-45

寺崎千華（2015a）「児童養護施設における『生い立ちの整理』の現状と意義に関する研究」『人間発達学研究』6, 121-122

寺崎千華（2015b）「児童養護施設における『生い立ちの整理』に関する研究 全国児童養護施設調査より」『子どもと福祉』8, 123-128

山本智佳央・檜原真也・徳永祥子・ほか編（2015）『ライフストーリーワーク入門，社会的養護への導入・展開がわかる実践ガイド』明石書店

文献

厚生労働省（2020）「児童養護施設入所児童等調査の概要」（平成30年2月1日現在）

厚生労働省（2022）「社会的養育の推進に向けて」

檜原真也（2015）『子ども虐待と治療的養育 児童養護施設におけるライフストーリーワークの展開』金剛出版

みずほ情報総研（2016）『社会的養育関係施設における親子関係再構築支援の取組に関する調査報告書』

才村真理 & 大阪ライフストーリー研究会編（2016）『今から学ぼう！ライフストーリーワーク 施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル』福村出版

曾田里美（2013）「児童養護養護施設における